千年迷宮SS番外編
横たわる探偵の事件簿
前編
©Haruno Atori/Yu Aikawa

「終わったのか」
　と呟（つぶや）くと、ああ、終わったんだと誰かの声がした。
　全部終わったんだよ、なにもかも。
　だからお前は休んでいていいんだ。
（馬鹿な。休んでいる場合ではない…）
　そう反論しようとしたが、意識がぼんやりとしていて唇を開くことさえままならない。
　泥のような眠りに捕らえられ、彼はまた闇の中に深く沈んだ。

◆

──何故だ。
　ベッドの暗い天蓋を見上げたまま、メサ

イア・リードは考えた。
──何故、夢を見なかった…？
　どんなに疲れていても眠りに就けば悪い夢ばかり見る。それがいつものメサイアだ。覚醒作用のある《紅百合草》の中毒を抱えてからは、とくに夢見が酷かった。
　しかし今日の目覚めはいつもとは違っていた。夢の中の苦痛に耐えきれずに目を醒ましたわけでもなく、うなされて汗だくになっていたわけでもない。深い場所から浮上するように、ごく穏やかに覚醒したのだった。
　幼い時に親元から引き離されて以来、悪夢も見ずにただ眠りを貪ったのはこれが初めてのことではないだろうか？
　　そして…。
──何故だ。
　とまたメサイアは考えた。
──何故、ここにあいつがいるんだ？
　視線を動かすと、ちょうど人がひとり入

るほどの隙間を開けた隣に誰かの肩が見えている。この暗がりでも金の髪はわずかな光を集めてうっすらと明るかった。毛布を抱え込んだまま背中を丸めて眠っている姿は、まるで安全な巣に入り込んだ獣のようだ。

　寝台を通して伝わってくる体温に居心地の悪さを感じ、メサイアは男から目を逸らした。悪い夢を見なかったのはその暖かさのせいかもしれない。そう思いながら起き上がろうとして、彼は小さく呻き声を上げた。体中の関節が軋み、閉じたばかりの傷の内側が刺すように熱い。

「…起きられましたか。無理に起き上がらない方がよろしいと思います」

　天蓋から降ろされたカーテンの向こうから静かな声がした。聞き覚えのない声だ。

「誰だ」

「貴方様の主治医でございます、殿下」

　『殿下』と呼ばれるのは、メサイアがこ

のイスカ＝リンナム領の領主、国王だからだ。皇帝陛下を慮(おもんばか)って、七領を治める七侯は『殿下』と呼ばれるのがエンデトリアの習わしである。

ここはイスカ＝リンナム城か…。

メサイアは改めて広いベッドを見渡した。

人が十人は寝られるほどの空間。天蓋から垂れた厚い布は光を遮(さえぎ)り、体を横たえた足元は暗くて何も見えないほどだ。

自分が運び込まれたのは城の主寝室なのだろうとメサイアは考えた。つまりは彼自身の寝室である。領主となって一年と少しになるが、この寝台に横たわるのはこれが初めてのことだった。

それ以前にこの主寝室を使っていた元領主といえば、メサイア自身が断罪し、二度とは這い上がってこられない永久牢へと落とした相手である。どこかその気まずさも手伝って、見た目ばかりで機能性に欠けた

この部屋を、私室として利用することがなかったのだった。
「失礼しても？」
　とまた静かに声がしたので、メサイアは「ああ」と短く返答した。
　カーテンが薄く開けられ、男が顔を覗かせる。優しい顔立ちだがこれといって特徴の無い若者だった。若者とはいっても弱冠二十歳の領主よりはいくらか年上だろう。短く刈り込んだ髪は濃い茶色で、飾り気のない学者風の服に身を包んでいた。姿から人目を惹きつけるメサイアとは雰囲気から違っているが、瞳の色だけは少し似通っている。
「殿下がこの城にて医者を必要とされたのはこれが初めてのことでございますから、私のことを知らないのも無理はないでしょう」
　イスカ人の医師は頭を下げた。
「一昨日より殿下の治療に当たらせて頂い

ています」

「お前を信用しても良いのだろうか」

「私が貴方様をどうにかしようと思っていたら、いつでもそうできましたよ」

　そうだろうな、とメサイアは頷いて、枕に頭を落とした。

（それにしても…二日間も眠りこけていたとは…）

　メサイアは瞼（まぶた）の上に手を当て、瞳を閉じた。手のひらがやたら熱い。

　いつのまに着替えさせられたのか、毛布の下の体は薄い寝間着に包まれていた。

　見知らぬ寝台、見知らぬ衣服。全身にはいまだ力が戻っていないようで、手足がどこか他人のもののように思える。

「痛みはございませんか。…酷（ひど）い…お怪我が多くて」

　言い淀（よど）みながら医師は眉を顰（ひそ）めた。治療の際に彼の主君がどんな目に遭（あ）ったのか、ある程度は想像が付いたのだろう。唇を噛

みしめながら俯いている。
「痛い」とメサイアは口にしなかった。目覚めた瞬間から徐々に全身の痛みは蘇りつつある。しかし暗い森の中で血を流しながら感じていた凍るようなあの寒さ、すなわち命の危機はすでに消え去った。
「問題ない」
メサイアが答えると、医師はほっとしたように顔を上げた。

かつて壊滅したはずの反政府組織、《血統復古党》の残党たちに隣国の領主、七侯のザン・オーデュポンが連れ去られたのは半月ほど前のことである。皇家の古い血を引くザンを皇帝に擁立し、皇帝ユアンの退位を迫るのがその主な目的だった。
仲間であるザンを救うために自分の領地へと単身乗り込んだメサイアは、潜入後の裏切りが発覚して以後《紅百合草》による洗脳と執拗な拷問を受けた。

その後森の中で繰り広げられた残党たちとの死闘は傷だらけのメサイアの体をますます痛めつけることとなった。
主君（ユアン）への想いを心の支えにしながら抗い、それでも死の間際まで追いつめられたその時——同じ七侯であるタイタス・ラムが現れ、メサイアを窮地から救い出したのだ。
とうとうテロリストたちの手から仲間とこの城を取り返したあの朝、皇帝ユアン・ジュノー＝イグニスの腕の中でメサイアは気を失ったのだった。
そのあとのことは全て記憶にない。自分がどうやってここまで運ばれてきたのかもわからないままだ。
ユアンが率いてきた騎士団も、隣に眠る男が率いてきた他国の騎馬兵たちも皆満身創痍で、自分と同じように休息が必要だったことだろう。彼らがこの城に今も滞在しているか訊ねると、医師は「はい、おられ

ます」と答えた。
「陛下は」
「だいぶお疲れのようでしたが、南西の棟で休まれた後は元気を取り戻しておられます。私を見かけると貴方様がいつ起きられるのか、それぱかり訊ねていらっしゃいます」
　そう言いながら青年は微笑んだ。
「ザン…あの人は」
「ザン様もひとまずは南西の客室でお休みになられています。もとの部屋に戻るのは嫌だとおっしゃられて、侍従長が陛下の近くにお部屋を用意したようです。オクト＝ノクテ領から主治医が派遣されてくるようですが, 治療には時間がかかると思います」
「そうか…皆不自由ないといいのだが」
「解放された者一丸となって、皇帝ご一行が充分に休息を取られるよう頑張っていますよ」
「それは…苦労をかける」

いいえ、と青年は首を振った。
「皆あのテロリストどもではなく、陛下や殿下のために働けることが嬉しいのですよ」
メサイアは頷いた。城の中が今どうなっているかは気に掛かるところだったが、ともかく満足に動けるようになるまで静かにしているほかはない。
「それよりも今はご自身の治療に専念されて下さい。体調は徐々に戻られつつありますが、起き上がるようになるまでにはまだ時間がかかりましょう。無理ない程度に少しずつ滋養を採られ…」
といいかけた医師の目が丸くなる。メサイアの向こうにもう一人、誰かが眠っていることに初めて気が付いたのだろう。慌てて目を逸らせるとまた深々と頭を下げた。
「あの…と、ところで…殿下にお話があるという方が昨夜から部屋の前にいらっしゃっておりまして。目を醒ますようなことが

あれば至急知らせるようにと言われているのですが」
　と医師は声を潜めた。
「お通しして良いでしょうか？それとももう少し時間を空けた方が？」
　ちらりと金髪の方を見やるのを見て、メサイアは完璧に誤解されているなと考えた。
「話…？いったい誰だ」
　白鳳騎士団のジェド・ベル殿でございます、と医師は答えた。

◆

「ちょっと待ってくれよ、なんでタイタス・ラムがそこに居るんだ？」
　古めかしい主寝室に足を踏みいれたジェド・ベルは物珍しそうにあたりを見回していたが、メサイアの元にやって来るなりそ

う叫んだ。
　淡い色の髪に、明るい青の瞳。皇帝の幼馴染みであるジェド・ベルは、この春からユアンの護衛を務める新米騎士だ。メサイアよりやや小柄だが、その動きは俊敏で隙がなく、本人自身の性格も同じように隙がない。
　柔らかい物腰でどこへ行っても溶け込める彼は、同時に抜け目の無いしたたかさを兼ね備えていて、裏も表も無邪気なユアンとはまた違う個性の持ち主だった。騎士団長のロレンス・アクロイドは彼をしばしば調査役や斥候に任じることがあったが、それも適材適所というところだろう。
　そのジェドがベッドの奥を指さすのを冷たい目で見つめ、
「何故なのか、こちらが聞きたいぐらいだ」
　とメサイアは答えた。
「あんたの主治医がやたらと恐縮してたのはこいつのせいだったか。病み上がりの領

主がまさか同僚をベッドに連れ込んでいるとは思わないですもんね！」
　連れ込んだわけではないんだが、とメサイアはまた無表情に呟いた。
　と、周辺が騒がしいことに気付いたのか、隣の男が大あくびをしながら寝返りを打つ。うるせえな、と毒づいて隣のメサイアに気付くと再び「あーあ」と大声を上げた。
「なんで起きてんだよ、メサイア…。めんどくせえな。ずっと寝てろ」
「そう何日も寝ていられるか。この足が元気なら気付いた時点で蹴り出してるぞ」
　メサイアが唸(うな)るように言うと、タイタスが頭を掻きながら身を起こす。
　主寝室は薄暗かった。カーテンをすべて閉じているので大きな窓から差し込む光が遮られ、床にぼんやりとした影が落ちている。それでも先ほどまで締めきっていた天蓋のカーテンが上げられているせいで、タイタス・ラムは眩しそうに隻眼を細めた。

「別にいいだろ、こんだけ広いんだし。毛布はフワフワだし、シーツはサラサラだし」
「あんた、自分の軍といっしょに兵舎にいたはずだろ？」
　ジェドが呆れかえってそう言うと、追い出されたんだよとタイタスが困ったように答えた。
「うちの親衛隊長が俺さまのことをしばらく出入り禁止にするからって」
　七領のひとつ、ルーメンの領主であるタイタスが皇帝騎士団の応援としてイスカの地まで連れてきたのが少数精鋭の彼自身の親衛隊である。ルーメンからの面々は今は隊ごとイスカ城北東の兵舎で休ませてもらっているんです、とジェドが説明した。
　北東の兵舎とはイスカの誇る中央軍の将校が寝泊まりする宿舎で、すぐ脇にはイスカ城の警備兵用の本部や厩舎、牢獄の地上部分などが建ち並んでいる。
「どうせ夜通しどんちゃん騒ぎしてたんで

しょ。皆疲れ切ってるのに、なんでそんな元気なんです」
「せっかくイスカ軍と親交を温められる機会だしよ…」
　衝突した両者が関係回復できるなら、それにこしたことはない。しかし徹夜続きでここまでやってきたルーメン人たちをまずは休ませるほうが先だと判断し、親衛隊長が一人ではしゃぎ回る主君を追い払うことにしたようだ。
「寒かったから誰かのところに入り込もうと思ったんだが、ザン様のところにいったら侍女たちに叱られるし、ユアンのところはロレンスの奴が全力で見張ってるし、親衛隊長には『ルーメンの名誉に関わるから侍女や下女たちのベッドには絶対潜り込むな』って釘刺されるし」
「だからってちゃっかり城で一番豪華な主寝室に忍び込むとは…さすが元盗賊っていうかなんていうか」

HARUNO ATORI HALYOU @aikawayou

ジェドはため息をつき、まあいいでしょうと二人に向き直った。

「メサイア・リードに内密の相談があったんだけど、この際だから元盗賊氏にも聞いて貰いましょうか」

「内密の相談ねえ…ま、いっか暇だし」

タイタスが再びベッドにだらりと長身を伸ばす。

「あくまで宰相殿への相談ですけどね。…とはいえ寝床から起き上がれない相手に話すことじゃないと思うんですけど、もう俺たちにはお手上げで」

「いったい何があった」

しびれを切らしてメサイアが問うと迷ったようにジェドの視線が少し泳ぎ、そしてまた彼を見た。

「実は…ですね」

姿の見えない何者かが、この城を歩き回っているようなんですよ、とジェドが言った。

「そしてその『何者か』は…どうもユアンの命を狙っているようなんです」
「…姿の見えない暗殺者…？」
　メサイアが呟くと、ジェドは頷いた。
「だから俺たちはいまかいまかと待っていたんですよ。この城の所有者でもあり、マグナ･エンデトリア帝国宰相でもあり、元名探偵でもあるあんた──メサイア･リードが目を醒ますのをね」

◆

「無理無理無理、俺さまお化けは無理だから」
　毛布を抱えたまま寝台から飛び出したタイタスを、メサイアはまた冷たい目で見やった。
「姿が見えない『なにか』がいるからといって、お化けとは限らないだろう」

「とりあえず落ち着いて。ラム卿はまず毛布を病人に返しなさいよ」

　ジェドがやれやれとベッド脇の椅子に腰を下ろす。

「だっていかにも出そうじゃねーかよ、この城…！」

「もちろん…ここには数多くの怨念が棲みついているのだよ」

「イヤアアアァやっぱお化けかよぉぉ」

「宰相殿もむやみに脅さないで下さい。ますます一人で眠れなくなるでしょこの人。責任取れるんですか」

「いや、取らない。…しかし幽霊だかなんだか知らないが、ユアンを狙っているというのは本当なのだろうか」

　ベッドに半身を起こしたメサイアが振り返ると、ジェドが真剣な目で頷いた。

「何者かの存在が発覚したのは昨日の夕飯時です。ユアンの皿だけに毒が盛られていたのです」

「最初から詳しく話してくれたまえ」
　とメサイアは言った。
「できればこの城の状況も含めてすべて」

──一昨日の夜更け過ぎのことだ。
　入城とともに様々な手続きを一通り済ませたユアンは昼から客間の一つに入り、入浴を済ませ、一人休息をとっていた。
　その扉の前にはつねに白鳳騎士団員が立ち、何人も出入りできないように見張っていたという。
「もちろんロレンス団長も自ら扉のまえに立っていました。おかげで指示は全て立ったままの団長から受ける羽目になったんですけどね」
「ロレンスのことだから、警備に抜かりはなかったのだろうね」
　メサイアが言うとジェドがもちろん、と首を振った。
「騎士団も交代で休みを取りながら、イス

カの警備兵とともに、城の中に怪しい者が居ないか、しらみつぶしに調べさせて貰いました。我々がやると角が立つとも思ったのですが、背に腹は代えられないし、ここの領主殿はぶっ倒れているしで。とりあえずイスカのお偉いさんにもいったん城を出てもらってですね、侍女や侍従たちの身元までしっかりと改めたつもりです」
「まあ怪しいやつはとくに見かけなかったなあ」
　とタイタスも顎を捻(ひね)りながら言った。
「今回の首謀者どもはすべて牢にぶち込んであるし、うちの手下どもには代わりばんこに牢の入り口を見張るように言ってある」
「今回の首謀者というと、血統復古党(サングイニスト)の残党と、《紅の光(ルブルムルクス)》の子供たちと彼らに同調したイスカ軍兵士たちか」
　その全員が皇帝への反逆罪に問われている最中だが、ユアンはその過程で行われた

誘拐や暴行、殺人、拷問行為などを重く見ているようです、とジェドが付け加えた。
「それにユアンを殺そうとした貴族のパスカリス・ナイとその身内たちですね。牢にはギデオン・レッドフィールド卿が詰めていて、それぞれ細かく事情を聞き出している最中です。彼は法律の専門家だからうってつけと言えるでしょう」
「ギデオンか」
　メサイアが最後に彼を見かけたのは、子供たちの執拗な攻撃からザンを護るために門前広場の階を駆け上がっていった姿だ。その時のギデオンはすでに全身が血まみれで、至る所に傷を負っているようだった。
「彼には治療がまず必要なのではないか」
「手当はしてますがかなり無理してますよ。あんたやザンが心配なあまり、気を紛らわせようとして仕事を請け負っているんです。事情聴取はルーメン軍も手伝っていますし、騎士団から何人か出していますけど

ね」
　そういうわけで牢にはつねに人目があるし、血統復古党の残党が抜け出して城内をうろつくことは考えられないんです、とジェドは言った。
「なのにユアンの食事に毒が盛られていた…？」
「そうなんです。さっきも言ったとおり、ユアンは南西の棟にある客室で休んでいました。ザン様も騎士団も皆同じ棟の部屋を借りています。アナが夕飯の時に様子を伺ったら起きていたので、騎士団と同じ食事を部屋に持ち込んだそうです」
「持ち込んだのは誰だ？」
「アナが自ら厨房から運んだそうです」
　アナはジェドの双子の妹で、ユアンの幼馴染みである。騎士団の紅一点で、腕は立つが見た目は可愛らしいし、性格も素直なので団員たちからは妹のように可愛がられていた。彼女が毒を盛ることなどありえな

いなとメサイアは考えた。
　この双子ときたらユアンを護るのは自分たちだと言わんばかりに、一度はメサイアやロレンスの腕を試したほどなのだ。ユアン・ジュノー＝イグニスを大切に思う気持ちは誰にも負けないと、普段から豪語して止まない二人だった。
「アナは自分の分の食事も持ち込んで、ユアンとともにそれを取るつもりでいたようです。俺はちょうどその時仮眠時間に入っていたので直接は知らないんですけどね」
「つもりってことは食えなかったのか、結局」
　タイタスが首を傾げる。
「皿を前にして、ユアンがまた居眠りしだしたらしいんですよ。だからアナは扉の前の団長を呼んで、陛下をベッドに戻したらしいんです」
「食事はどうなった？」
「アナの方はそのままユアンの寝顔を眺め

ながら完食したそうです。『北国のミルクスープもたいへん美味しかったわ』と言っていました。もちろん体調にも問題なく。それでユアンの分だけをテーブルに残して、自分の皿は外に居た侍従の一人に返したと」

アナはそのままユアンの眠る客室の前で、ロレンスとともに見張りを続けたらしい。

「夜中になって、部屋の中から自分たちを呼ぶユアンの声が聞こえたそうです。ロレンス団長とアナが部屋の中に入ってみると、テーブルの前にユアンがいて、真っ青な顔で『どうしよう、これ毒かもしれない』と」

夜中に起き出したユアンはどうやら空腹に耐えきれなかったらしい。置いてあるスープを温め直して貰う前に、ひとくちそれを口に入れてしまったのだ。

「たったのひとくち分でユアンは違和感に

気が付いたんです。これは…前に嗅いだことのある毒薬の匂いではないかと。それで団長が速攻ユアンを抱えて風呂場へ走って行きました。アナと二人で無理矢理水を飲ませ、胃の中のものを吐き出させた」

「それで…ユアンは無事なのか？」

　先ほどまでお化けを怖がっていたはずのタイタスだったが、すっかり表情が変わっている。タイタス・ラムは仲間を傷付ける者を許さない男だ。それが生涯の弟分と決めたユアンならなおさらだった。

「しばらく震えていたそうですが、やがてけろりとして。とにかくなにか食べるものをくれと。ロレンス団長はすぐに箝口令を敷き、関わった者に毒のことを口外するなと言いました。だからこの城の大半の者はそんな事件があったことなど知りません」

「箝口令はやむを得ないだろう。僕が彼でも同じことをする」

　メサイアは頷いた。

クーデターは未然に防がれたといえ、皇帝とイスカ人の間から完全にしこりが消え去ったとは言えなかった。そのような状況で皇帝暗殺未遂が起きたのだ。

しかも前皇帝であるロレンス・アクロイドの実の父親を毒殺したのが、まさにメサイアの今横たわっている寝台の前の持ち主、前イスカ・リンナム領主だった。

騎士団の中にイスカ人を疑う空気が高まれば、この城に彼らを迎え入れ、懸命に支えている者たちの間にも不満が広がって、やがてはそれが新たな衝突を生むかも知れない。そのことだけは避けなければならなかった。そうでなければイスカ人の血を一滴も流さずにユアンがこの城まで辿り着いた努力も無駄になってしまう。

「俺が叩き起こされて部屋へ行くと、責任を感じて石みたいに黙り込んじゃったアナと全身に緊迫感がみなぎって怖い顔になってる団長とひたすら『俺は大丈夫』を連呼

するユアンが並んでて。その場で速攻回れ右したくなりましたよ。なんか面倒なことがあったんだなって」
「この事件を知るのは君を入れてその四人なのか」
「あとは副団長と、騎士団員が数人です。アナと俺を含めてすぐさま状況の調査が行われました。部屋、スープ、厨房。城の者に気付かれないように調べるのは骨が折れますがなんとか」
　よろしい、とメサイアは頷いた。
「そこで君たちは犯人を『姿の見えない相手』と結論付けたわけだ。その理由を聞かせて貰おうか」

◆

　簡単に言うとユアンの使っていた客室は密室だったんです、とジェドが言った。

「そのとき扉の前にはアナと団長がいた。彼らが不審人物をまんまと通すと思います？」
「思わねえな」
　とタイタス。彼はさっきまで抱えていた毛布を放り出し、主寝室に備えられた古めかしい長椅子の背に尻を載っけて腕を組み、話に聞き入っていた。カーテンの隙間から細く差し込む晩秋の太陽がときおりその褐色の肌を撫でている。琥珀色の瞳は鋭く、さっきまでメサイアの横で眠っていた無防備な姿とはまるで別人だ。
「部屋に置きっぱなしになっていたときに、誰かがスープに毒を入れたと、君たちは考えているのか」
　メサイアが確認のために問うと、そうですとジェドは答えた。
「ユアンが騎士団と同じ食事を取っているのは、もとから安全を考慮してのものです。本人も皆と同じものを食べたいと言ってい

ますしね。騎士団員たちやアナとユアンが口にしたのは同じ鍋で作られたスープで、そこにはもちろん毒は入っていませんでした。その日の夕方に俺も食べましたけどとくに問題なかったです」

「じゃあ器に毒が付けられていたという可能性は？」

　メサイアが訊ねると、ジェドはうーんと唸りながら首を捻った。

「スープを鍋から皿に取り分けたのはアナで、食器は適当にそのへんから選んだと言っていました。いっしょに持ち込んだパンや果物にも毒は入っておらず、ユアンのパンにはリィプの歯跡が付いていましたが、あの鼠は今日も憎らしいほどピンピンしています」

「では、もしも食器に仕込まれていたとすれば、それはユアンを狙ったものではなく無差別に誰かを傷付ける目的だったということになる」

「まあ宰相殿のおっしゃるとおりただの愉快犯だという可能性もありますが。しかしそもそもこの城の中に、毒薬を隠し持った怪しい人物が居るとも思えないんです」
「人の裏側はそう簡単に見えないものだよ。…だが誰かを疑う前にいくつか調べてみたいことがある」
「宰相殿の頭には、もういくつか可能性が浮かんでいるんですね？」
　ジェドが待ってました、と言わんばかりに椅子から立ち上がる。
「可能性というほどたいしたものではないが」
「俺さまも協力するぞ」
「協力というより、そもそもこの部屋に貴様が忍び込んだ時点で、いろんなことを疑ってみなければいけないのだよ」
「えっ、このラム卿がどうかしたのですか？」
　タイタスも「ん？」と言う顔になる。

「この中央棟の主寝室にも警備はついていたはずだ。医師もすぐ外の控え室にいる。だが彼はタイタスがここにいることを知らなかった…」
「えっ」
　とジェドが驚いた。
「あんた、いったいどこからこの部屋へ忍び込んだんです？」
　んー？と首を傾(かし)げながらタイタスは西側の暖炉のあたりを指さした。
「あの辺だったかな」
「あの辺て、壁じゃないですか…！」
　そう、とメサイアは頷いた。
「つまりは隠し通路だよ。城主として告白するが、この城のあらゆる壁という壁には秘密の通路が隠されているのだ。もちろん客室にもそれは作られている」
　《紅の光(ルブルムルクス)》の子供たちの手から逃げたときにも、メサイアはその隠し通路を使って城の外へ出たのだ。

「もちろん通路を調べたからといってすぐさま犯人が見つかるわけではないが…今すぐユアンの部屋を調べてみるがいい。なにか新しい発見があるかもしれない」
「そうします…！」
「俺さまも手伝うぜ！」
　二人が勢いよく飛び出していくのを、メサイアは引き止めた。
「一つだけ頼みがある」
「なんだ？」
「なんでしょう」
「僕も箝口令を敷きたい。僕が目を醒ましたことはここだけの秘密にしてもらいたいのだよ。主治医にも口止めを。もちろんユアンにもね」
　心得た、と口々に言うと二人は部屋を出て行った。同時に部屋に差し込んだ陽の名残が、ふわりと部屋から消えていく。
（誰がいったいユアンを狙っているというんだ…？）

（動機のあるものは？）

（やはりユアンではない『真の皇帝』の誕生を待っていた者なのか…それとも…）

しんと冷え切っていく寝台の上でメサイアは古めかしい造りの領主の寝室を見渡した。

いくつの陰謀がここで生まれただろう。

何人の領主がここで昏（くら）い考えに取り付かれたのだろう。

前皇帝を暗殺し、その身を滅ぼしたロンギヌスその人のように。

（ここには本当に怨念が棲みついているようだ）

恵まれないその身を呪い、つねに世を敵視するイスカそのものの怨念が。

長い歴史を刻んだ城を受け継ぎ主（あるじ）となった青年は、いつまでもその薄暗がりを見つめていた。

《後編につづく》

横たわる探偵の事件簿
千年迷宮SS番外編
後編
©Haruno Atori/Yu Aikawa

夕暮れになり、閉め切った窓がガタガタと音を立てた。
丘の上に建つ城の周辺には下界より強い風が吹く。堅固な石壁はびくともしなかったが、こんな日にはどこからか隙間風が入り込んで冬の到来が一層身近に感じられるのだった。

ジェド・ベルとタイタスを部屋から見送ってから、メサイアは主治医の手を借りて少しだけ食事を摂った。その後ベッドの上で今回の事件についてしばらく考えを巡らせていたが、どうやらそのまま眠り込んでしまっていたようだ。
午睡の最中にメサイアは再び悪夢を視た。その内容ははっきりは覚えていないが、夢の中のなにかに追い立てられるように目を醒ましたときには、もう部屋の中は暗かった。

意識を取り戻したということは内密にしておきたいという主の願い通り、主治医は部屋に明かりを灯さないでいてくれたようだ。主寝室に煌々と明かりが点いていれば、事実はどうであれ、メサイアが活動を始めたと噂が広まるのは明らかだからだ。

今は小さな燭台だけが一つ、ぽつんとベッドサイドで光を放っている。外気の揺れを反映しているのか、風の音がするたびに燭台の炎が大きく揺らめくのだった。

メサイアは酷くなってきた全身の痛みを堪えながら、ベッドの上に半身を起こしていた。天蓋のカーテンは枕元だけを残して閉じられている。そのすぐ傍、ベッドの脇には先ほどから見知った影が二つ並んでいた。

その片方、長身のほうの影が、

「驚かせてすまない」

と謝ったので、メサイアは頷いた。

「驚いてはいないが、やはり内密にはでき

なかったのかジェド・ベル。ロレンスにも僕が起きたことは知らせないで欲しかった」
「そりゃあ、無理ってもんですよ」
　苦笑いを漏らしながらもう一つの人影が答えた。
「この人に気付かれずにユアンの部屋を探るなんて不可能です」
　当然だというようにロレンスが首を振った。
「ともかくメサイアに相談出来るようになったのはありがたいことだ。俺自身がかなりほっとしている。この広大なイスカ城はまるで迷路のようだし、どこに敵が潜んでいたとしても俺たちには捜索のあてもない。騎士団の力のみでユアンを狙っている犯人を捕らえるのは至難の業だと思っていたところだ」
　若き騎士団長の口ぶりは真摯で、心の底からメサイアを頼りにしているのが伝わってくる。

この同い年の青年──ロレンス・アクロイドとはユアン皇帝を挟み、しばしば双璧と称される間柄だ。お互いの役割がそれぞれに無い部分を補い合っているだけに、ライバルと意識することはなかったが、それでもここまで信用されると少々くすぐったい気もしてくる。

（そういえばこの男は…僕の忠告を守らなかったことは一度としてない）

メサイアは長身の影を見上げた。

（僕がユアンを護りたい一心で動いていることを、ロレンスも知っているからだ）

見返す深い色の瞳が燭台の暗い光を受けてきらきらと輝いている。ふと彼の手元に視線を落とすと、袖元からちらりと治療の痕跡が見えた。

（彼もずいぶん怪我を負ってしまったようだな…）

ユアンに付き従って騎士団をここまで率いてきたロレンスは、このたびの戦いでも

自ら剣を振るい主君を護っていたようだ。あの朝目にした彼の真っ白なマントには、たしかにいくつもの血の染みが広がっていた。
しかし我が身を犠牲にしながら大事件をくぐり抜けてきたであろう騎士団長の瞳に、疲労の影は見られない。彼の全身には今この瞬間も、大切な主君の身を護ろうとする緊張感が漲っている。
「それで…君たちはユアンの部屋を調べ直したんだね」
彼とはいろいろと話したいこともあるが、とりあえずは今はユアンの安全が優先されるだろう。そう考え、メサイアは事件へと意識を戻した。
「それはもう、宰相閣下の助言通りに。ユアンの食事に毒を入れた犯人が、いったいどこからやってきたのか…それを突き止めようとがんばりましたとも」
握りこぶしを胸の前に付き出しながら、

ジェドが軽快に言った。幼馴染みの陛下に対する彼の忠義は疑いようもないが、ときおりはその柔軟さが軽薄にも見えるのが玉に瑕だなとメサイアは考えた。しかし同時にこの憂鬱な城で伏せっている身としては、彼の割り切った明るさが救いのようにも思える。
「とりあえずは団長に許可を得て、ですね。団長とアナがユアンを連れ出してザンの部屋へお見舞いに行っている間に、俺とタイタスでもう一度部屋をくまなく調べてみたんです。そうしたらやはりありました。隠し扉がね」
　相当凝った細工で、部屋の装飾と一体になっていて簡単にはわかりませんでしたよ、とジェドが幾分恨みがましい口調で言う。
「隠し扉は部屋側から開けることができたのか」
　メサイアが問うと、ジェドがええ、まあ

と答えた。
「鍵が掛かっていたんですけど、タイタスが盗賊時代に培った技を駆使して開けてくれたんです」
　説明するジェドの横で、ロレンスが悔しそうに視線を落とす。
「ユアンが部屋に入る前に点検はしておいたはずだったが、あれを見逃していたとは…。俺個人としては悔やんでも悔やみきれない」
「鍵が掛かっていたのなら君が悔やむ必要は無い、ロレンス。むしろ城主の僕がその存在をまず伝えるべきだったのだよ。隠し通路の存在は僕しか知らないはずだし、そこへの扉は僕にしか開けられないのだからね」
「いや、メサイアはずっと意識がなかったのだから、伝える機会は無かったと思う」
「あーあーはいはい、宰相殿も騎士団長も美しき信頼関係は大変結構ですが、庇い合

いはあとでごゆっくり。…と、しかし。城主しか知らない、開けられないっていうのは…それはマジなんですか？」

そうだ、とメサイアは答えた。

「言ったとおり、この城には隠し通路が迷路のように張り巡らされている。ただし…いくつもに枝分かれした暗い通路を正確に進むには、相当な苦難が伴うと思われる。場所によっては落とし穴や罠も仕掛けられているようでね。下手をすれば妙なところに落ち込んで助けを呼ぶことも出来ず、二度とは陽の当たる場所に出てこられないはめになるだろう。しかし代々の領主にだけは、その詳細を知る手段が与えられるのだよ」

「手段…ですか？」

「この城の全体図…地図と呼んでいいだろうか。イスカ＝リンナム領の領主となった者は、それをこの城とともに受け継ぐのだよ。ちょうどあの千年迷宮城にも似たよう

なものがあったが、こちらは隠し通路の詳細を図に描いたものだ」
「なるほど…。じゃあ犯人がその地図を手に入れて、隠し通路を使ったっていうことなんでしょうか。しかし各部屋から隠し通路へ通ずる扉も領主にしか開けられないと、あんたは言いましたね」
「その通りだ。たとえ地図を手に入れても、領主の持つ鍵を手に入れなければ意味が無い。通路からどこへも出ることが出来ないのだからね」
　メサイアは唇の端に笑みを浮かべた。
「実は即位後にこの城を訪れたときに、その鍵を使っていくつかの扉を開けておいたのだ。ただの好奇心からだったが…この古城の壁の裏という裏に隠し通路が走っていることを知って、探偵の血が騒いでどうしようもなかったのだよ。もちろん、君らやユアンの滞在している棟にはいっさい手は付けていない。この中央棟のみの話だ。先

日ここから脱出するときも、その中の一つを使ったというわけでね」
　ロレンスとジェドがあっけにとられていると、突如暗闇の中から声が聞こえた。
「やれやれ、好奇心は探偵を殺すかもしんねえぞ。もしかしてここの隠し扉が開いていたのも、そのお前の気まぐれのせいだっていうのか」
　声のした背後を振り返り、二人の騎士が身構える。しかし現れた人影がタイタスだと知って、二人はすぐに緊張を解いた。
「いったいどこから現れた…タイタス？」
　怪訝な表情のロレンスに、タイタスが手を振ってみせる。
「よお来てたのか、ロレンス。ザン様の見舞いはもう済んだのか？お前がユアンの傍を離れるとは珍しいな。…俺さまが来たのはほら、そこの西側の隠し扉だ」
　タイタスはその方向を指して見せたが広間ほどもある寝室の西側の壁は遠く、ベッ

ド脇からはあたりの暗がりと判別がつかなかった。
「もしかしてそこにも通路が…？」
　ロレンスの声にメサイアは頷いた。
「そう、この部屋には二つの隠し通路の入り口があってね。僕が解いたのはそのうちの一つだよ。この主寝室の西側の壁には、城の中庭に出ることのできる通路が隠されている。いつの時代のものかはわからないが…おそらくは領主に危機が迫った時に、逃げ出せるように作られたのだろうね」
「そうそうそれな。まあまったく偶然なんだけどよ。昨日たまたま中庭にある彫像の台座に入り口を見つけて、この部屋に忍び込んだってわけだ。ここが性悪野郎の部屋だとは思ってもみなかったけど」
　そう言うとタイタスは騎士たちを押しのけ、ひょいとベッドに飛び上がった。そのまま無遠慮にメサイアを跨ぎ、彼の横にごろりと転がったのを見てロレンスが目を丸

くする。
　驚いた顔の騎士団長に脱いだブーツを投げてよこすと、タイタスは広いベッドに手足をのばした。
「あーやっぱ狭苦しいところは苦手だわ。あんなところに何時間も居たら気分が滅入っちまう」
「ここはお前の休憩所じゃないぞ、盗賊野郎」
「ケチかよ。すげえ苦労したんだから、ちょっとぐらい休んでもいいだろうがよ」
「苦労…？そういや貴様、何故だ？やたらほこりっぽいな」
　金髪頭にくっついた蜘蛛の巣をメサイアが眺めていると、あの…と申し訳なさそうにジェドが手を上げた。
「そんな過酷な迷路になってるとは知らなくてですね。俺が頼んだんです、タイタスに」
「何を」

「隠し通路がユアンの部屋からいったいどこへ繋がっているのか、それを探って欲しいって」

「それで貴様は地図の存在も知らずに、あの危険な暗闇を彷徨っていたというのか」

　メサイアが驚いて問うとタイタスは大きくため息をつき、彼の背後から枕を一つ抜き取った。

「まじで何回か死にかけたぜ。まあおかげであの通路がこの城のどこに通じているかは掴めたけどな」

　それはどこなんです！とジェドが叫ぶ。しかし肝心のタイタスは枕に突っ伏したまま動こうとしなかった。

「…俺さまもう…寝てもいい？」

　しばらくしてくぐもった呟き声が訊ねると、

「だめだ！」

　とユアン・ジュノー＝イグニスの双璧が声を揃えて答えた。

HARUNO ATORI /HALYOU @aikawayou

◆

「あれは…たぶん隠し部屋だ」
　メサイアの隣でごろりと向きを変えると起き上がり、ベッドの上であぐらを組むと、タイタスは組んだその足に視線を落とした。
「それもただの隠し部屋じゃねえ。なんていうか…領主のためだけに作られた…」
「執務室の壁の裏に隠された個室群だな」
　静かに言ったメサイアに三人の目線が集中する。
「知ってたんですか…！ユアンの部屋の隠し通路がどこにつながっているのか…」
　知ってるなら言えよという顔でジェドがため息をつく。
「ああ。賓客のための寝室は、だいたいがこの中央棟の地上部に位置する領主の執務

室に繋がっている。僕が鍵を開けたときには、その一群だけは避けたのだ」
「何故避けた？」
　とロレンスの問いに、メサイアはただひと言「薄汚い場所だ」と答えた。
「本当にな、あそこは…」
　タイタスが俯いたまま言う。たぶん領主本人であるメサイアを前にして言いにくいのだろう。代わってメサイア自身がとくに感情も込めずにそれらを淡々と述べてみせた。
「執務室から各客室に繋がるあの通路は、領主とその僕が秘密裏に客を監視するために作られたのだろう。時には拉致することもあったと思う。秘密の通路から繋がっている執務室の隠し部屋の中には、拷問するためとしか思えないものもあったし、またあらゆる快楽に耽るための小部屋も存在した」
　この城の闇の側面がそこにはあった。メ

サイアは前城主からその閨まで受け継いだのだ。
「その中の書庫に通路の見取り図と鍵がしまわれているはずだ。ユアンに毒を盛った犯人は、執務室からやってきたのだろう」
「ああ、それは間違いがない」
　タイタスが頷いた。
「実はなんの手がかりもなくユアンの部屋から執務室まで辿り着いたわけじゃねえんだよ」
　通路の中には誰かの足跡が続いていたんだ、と彼は言った。
「俺さまの知る限り、通路はしばらく使われていないようだった。そいつの足跡だけが残っていたんだ」
「それじゃあ宰相殿の言うとおり、犯人はやはりこの城の領主執務室から隠し通路を使い、ユアンの部屋へ忍び込んだということですね」
「執務室の裏に見取り図と鍵があったとい

うなら辻褄も合う」
　ロレンスが頷いた。
「だけどな…ひとつ、困った問題があってだな」
「なんだ？」
　急かしたロレンスを憔悴したように見上げ、タイタスは首を振った。
「執務室の扉は外側から施錠されて、誰ひとり出入りできないようになってたんだよ。数々の屋敷に入り込んできたこの俺さまが見たこともない鍵穴で、解こうとはしてみたんだがお手上げだった」
「つまり…通路の先は密室だった…？」
「もちろん執務室の中もその裏の隠し部屋の中も全部見てまわったんだぜ？けどそこには誰ひとりいなかったし、隠し通路の足跡はユアンの部屋を往復したっきりで他の場所にはいっさい付いていなかった」
　つまりその人物は執務室から無数に伸びる隠し通路を使ってユアンの使う客室にし

か出入りしなかったということだ。
　足跡を残して消えちまったようで薄気味悪い、とタイタスが自身の肩を抱きしめる。
「そうだ。執務室の扉は僕が仕事をする時のみ開かれる。普段は鍵が掛かっていて、誰にも開くことは出来ないのだよ。もちろん僕が血統復古党（サングイニスト）の残党の手に捕まっていた間も、そこは閉ざされていた」
　現存する執務室の鍵は二つ、とメサイアは三人に指を二本立ててみせた。
「ひとつは僕が持っている。ただし今回は領主印とともに皇城へ置いてきた。アデル・ジュノーを捜しに旅立ったとき、自分の身に何が起こるかわからないと考えてその二つは持ち出さなかったのだよ。どちらも皇城のイスカリオット・ムーアが管理しているはずだ」
　イスカリオットは前の皇帝の時代に宰相を務（つと）めた男で、城を抜け出るときにメサイアは彼だけには旅に出ることを告げてい

た。今も皆の帰りを待ち、額に青筋を立てながら毎日仕事に追われているはずだ。
　その厳格な性格のイスカリオットがメサイアからの預かり物を紛失することなど考えられない。そもそも皇城からそれを持ち出して、イスカ＝リンナム領へやって来るにはそれ相応の日にちがかかる。だから使われたとすれば、もう一つの鍵のはずだとメサイアは三人に言った。
「で、その『もう一つ』は誰が持っていたんです？それさえわかれば、もう犯人を見つけたも同然じゃないっすか！」
「持っていたのはこの城の侍従長だよ」
「じゃあ侍従長を問いただせば…」
　ジェドに向かってメサイアは首を振った。
「残念ながら…それは出来ない」
「なんでだよ？この城にいるんだろ」
　不満げに唇を尖らせたのはタイタスだ。
「彼は…クーデター事件の最中に死んだの

だ。僕を血統復古党（サングイニスト）の手から逃がそうとして、奴らに捕まり…」

　白髪の侍従長の姿を思い出し、苦しげに言ったメサイアを沈黙が取り囲んだ。目を見開いたタイタスが「くそっ！あいつら」と呟き、シーツに拳（こぶし）を叩きつける。

　死んだのは侍従長だけではなかった。領主の身を案じた城の者たちの何人かが、敵に捕まったまま行方不明になっている。

　彼らは引き継ぎもなくいきなり連れ去られたので、後任者も決まらないまま、この城の者たちはユアン一行を出迎えたのだった。仲間を失いながらも精一杯もてなしを続ける彼らのためにも、メサイアは一刻も早く犯人を見つけなければと思った。

「侍従長たちの亡骸（なきがら）は、この丘陵のどこかに埋められていると思われる。その場所は血統復古党（サングイニスト）の残党たちか、事件の首謀者であった《紅の光（ルブルムルクス）》の子供たちにしかわからないはずだ」

「じゃあ鍵を奪えるのは奴らだけってことか…そんな馬鹿な…」
　そう呟いたジェドの声には落胆の色が濃かった。
「そうだ。そんなことはありえない。なぜなら彼らは全員牢の中に居るはずだからだ」
　ロレンスが声を押し殺しながら言う。
「あの朝門前広場に居た子供たちと、メサイアとタイタスが森で捕らえた残党は一人残らず連行した。脱走した者は一人も居ないのだぞ…？」
　その通りだとメサイアは頷き、タイタスに向き直った。
「警備に当たっているルーメン軍を疑うわけではないが、一応は確認しておかなければならない」
「しょうがねえな…」
　重い腰を上げてタイタスがベッドの反対側からカーテンの外へ出る。ロレンスがブ

ーツを投げて返すとタイタスは器用にそれを受け取り、片足で床の上を跳ねながら履き慣れたそれに足を突っ込んだ。

「性悪が欲しいのは囚人の名簿だろ？あと一人一人名前を確認しながらの面通しな？そんで押収した所持品の検分な？全部ギデオンや俺さま自らの手で済ませたけど、もう一回確かめてくる」

　一度だけ振り返り、メサイアに指を突きつけながら、

「けど絶対脱走はねえから、念のためな」

　と言い、彼はまた西の暗がりに消えていった。

「また隠し通路に入っていったよ、あの人。普通にドアから出入りすればいいのに」

　ジェドが呆(あき)れながら言う。

　控えの間には主治医だけが詰めているし、その外にいる警備兵には主治医に用があって出入りしているのだと伝えてある。ゆえにメサイアが活動していると知られず

に通行することは可能なのだ。
　それもメサイアと同列の地位にある七侯の一人ともなれば、来訪を止められるものなど誰もいなかった。
「いつまでたっても野良猫のようだ、あの男は」
　ほんの数日前に自身が当の本人から野良猫に例えられたことなどつゆ知らず、メサイアは悪態を付いた。
「しかし…これでもし脱走した者がいなければ、どうやって犯人を捜すというのだ？」
　ロレンスがメサイアに向き直った。
「まだ名簿を確認しなければなんとも言えないのだがね。なんとなく見えてきたことが、僕にはあるのだよ。全てを見通すにはまだ材料が足りないのだが」
　メサイアはちらりと横目でロレンスを見た。
「君がユアンの傍を離れて、わざわざ僕の所にやってきたのはいくつか内密の相談が

あるためではないのかな、ロレンス。もしかするとそれこそが――その『材料』かもしれないね」

◆

　そろそろユアンの警備に就く頃合いだと言い、ジェドが寝室を後にした。もしかすると内密の話をしやすいように、ロレンスと二人きりにしてくれたのかもしれない。
　ともかく一度腰を下ろすように言うと、ロレンスはその言葉に従いベッドに腰を下ろした。上背のある彼が座ると、先ほどまでに比べ急激に距離が近くなる。
「君とこんな風に話すのは、千年迷宮城で君にユアンを預けたとき以来かもしれないな」
　メサイアがそう言うとロレンスは頷いた。

HARUNO ATORI /HALYOU @aikawayou

「あの迷宮でメサイアがユアンに跪いた瞬間、俺はこれこそが己の姿なのだと気が付いた。ユアンを主君に選んだとき、俺はほとんど反射的に膝を付き、自分が何を思ってそうしたのかもよくわからなかったのだ。しかしメサイアが忠誠を誓う様子を見て、そうか俺もユアンにこれを約束したのだと改めて実感することができた」
　一見落ち着きがあるようで、ロレンス・アクロイドには感覚だけで動いているようなところがある。だからこそ彼の行動にはあまり裏表がないのだとメサイアは考えていた。
「そう、だからこそ僕は不思議なのだよ」
　深い青の瞳を見つめながらメサイアは言った。
「ユアンは君の胸の大部分を占めている…にも関わらず、君が今そこまでの焦りを見せていないことにね。大切な主君が毒を盛られたというのに」

「そんなことはない」
　ロレンスは俯いた。
「俺は焦りまくっている。ユアンに水すら口にして欲しくないほどだ。彼は相変わらず無邪気にこの城の者たちを信じ、差し出される菓子や食事を断らないし、俺はそれを止められない。もちろん団員が体を張って毒味は済ませているが」
　今すぐこの城から彼を連れて帰りたいという本心が、ひしひしとメサイアにも伝わってくる。だが育ちのいいロレンスは城の持ち主自身の前でそれを口にはしなかった。彼の配慮に感謝しながら、メサイアは答えた。
「今までの経緯から言っても、毒を使われることに君は相当敏感なはずだ。本気で止めない理由があるのだろう？いったいそれはなんなのだ？」
　ロレンスの両親は毒によって暗殺されているし、彼自身も毒をあおって死にかけた

経験がある。そのどちらもが血統復古党（サングイニスト）の手で作られた毒だった。
「ユアンはその毒の匂いを知っている…と言ったそうだね？彼はいつその匂いを知ったんだ？もしかして君が飲んだ毒と同じだったのか？」
あの時、ロレンスを失ったのだと知ったユアンの自失っぷりはメサイアの胸を刺した。魂が抜けたように廃墟の中に座り込んでいた彼を立たせたのが、誰でもないメサイアだった。
だがその解毒剤はもうすでに帝国全土に行き渡っている。血統復古党（サングイニスト）のテロを防ぐために皇城が取った手段が解毒薬を量産することだったのだ。
「いや、俺が飲み干したあの毒…ではない。しかしユアンのスープに入っていた毒は、たしかに俺も以前に嗅いだことのあるそれだった。ほかならぬ千年迷宮城でのことだ」
「千年迷宮城…！」

ロレンスが顔を上げ、まっすぐにメサイアを見た。
「間違いない。あのオセロが使った麻痺薬とたしかに同じ匂いだった」
オセロはメサイアと同じく教育機関《紅の光(ルブルムルクス)》をトップクラスの成績で卒業し、血統復古党(サングイニスト)の持つ研究所の責任者となった天才化学者だ。かつてロレンスが飲んだ毒も麻痺薬も、もとはといえばオセロの手によって開発された薬物である。
千年迷宮城の中で、あの狂人はメサイアを想うあまり、メサイアが皇帝に選ぼうとしていたユアンを毒牙に掛けようとしたのだった。
「あの麻痺薬は身体の自由を奪うもので、直接命を奪うものではない…だから君はまだ落ち着いていたんだな、ロレンス」
「二度と毒を盛らせるつもりなどないのだが、最悪ユアンがあの薬にやられてもその命は俺や騎士たちが護っている。隠し通路

の存在も暴かれた今、誰ひとりユアンを手に掛けることはできないと断言できる」
「ユアンは部屋を移ったのか？」
　とメサイアが訊ねると、そうだと返答があった。
「相部屋の騎士団員と部屋を代わり、ジェドと同じ部屋に移っている。多少冷えるが厚い壁は外壁側にしかなく、調べたところ隠し扉なども無いようだ。今夜は一晩中ジェドが見張る手筈になっているし、アナも毛布を持ち込んで同様に過ごすつもりらしい。俺も出来ればそうしようと思っている」
「そうか…」
　と思案しながらメサイアは呟いた。
「しかし麻痺薬を口にしたユアンの復活が早いようだったし、そうと知っていて本人が落ち着いているのが少しひっかかってね。以前にあれを吸った彼にとっても、麻痺薬はトラウマものだろう」
「相変わらずメサイアは鋭いな」

ロレンスが感心しながら言う。

「俺も気になったのだが、ユアンに訊いてもはぐらかされる。どうも…なにか隠しているような気がする」

「ユアンが隠し事をするのは、それを話さないと誰かと約束を交わしてしまっている場合に限られるだろう。それ以外に彼が君に何かを隠すことなど考えられない…」

ロレンスの目がベッドのシーツの辺りを彷徨っている。まだなにか話したいことがあるのだなとメサイアは考えた。

「思い当たる節があるのだね、ロレンス。そしてそれは僕に深く関係することだ。だからこそ君はこの僕に会いに来たのだな」

「メサイアには何も隠せないな」

しばらくためらったあと、ロレンス・アクロイドはまた口を開いた。

そしてユアンがその存在をひた隠しにしていると思われる人物について、彼なりの考えをメサイアに語ってみせたのだった。

《解決編に続く》

すみません、後編で終わらなくて…あとは
解決編の一回更新で終わる予定です。
更新はたぶんですが 8/15 になります。
（相川）

千年迷宮SS番外編
横たわる
探偵の
事件簿
©Haruno Atori/Yu Aikawa

——お前、やっぱり誰かに眠らされているんじゃないか。
耳元でそう低い声がしたので、メサイア・リードはまた自分が眠りに落ちていたことに気が付き、瞼(まぶた)を開いた。
見上げる天蓋は暗く、頭上を覆う厚い生地の色も今ははっきりとは見えない。
「起こしちまったかよ」
再び隣から密(ひそ)やかな声がして、メサイアは「かまわない」と呟いた。
「…戻っていたのか。今は夜中か？」
掠(かす)れる声で訊ねると、
「夜中っていうほどでもねえな。夕飯が終わった頃合いだ」
と、ややぶっきらぼうな調子で応(こた)えがあった。
「…なにか…聞こえるな」
天蓋のカーテンを通して、どこからか微(かす)

かに弦楽器の音色が聞こえてくる。それがイスカの伝統的な舞曲だと気付いて、若き城主は目を見開いた。彼がこの城で音楽を聴いたのは初めてのことだった。

村々の酒場でもしばしば演奏されることのある素朴で朗らかなメロディは、この厳めしい城にはまるで似つかわしくない。

「ああ、今夜は騎士団が城の連中を招いて夕食会を開いたんだよ。今はそのあとの余興ってとこだろ。盛り上がってるみてえだな」

どこか羨ましげにタイタスが呟いた。外から戻って来たばかりなのだろうか。すぐ脇にある外套の肩越しに、まとった冷気がじんわりと伝わってくる。まるで家族か恋人であるかのようにメサイアのベッドでくつろいでいるが、それは彼がただ無遠慮なだけで、たいして深い意味は無いようだった。

独り寝は苦手だというタイタスは、もと

もと盗賊団を率いていた頃から仲間である少年少女たちと抱き合って眠るのが常だったようだ。だからこうやって他人の寝床に潜り込むこと自体、彼にとっては珍しいことではない。
　ただし、依存と恋の境界が曖昧だったかつての少年時代には、そうやって寄り添ううちにいったい何人と実際に深い仲になったことだろうか——そちらの詳しい事情は、メサイアにも与り知らぬところだ。
「騎士団の主催ってことになってるが、今夜のあの騒ぎはユアンが言い出したことなんだぜ」
　メサイアのほうに寝返りを打ち、頭だけを起こしてタイタスが言った。
「ユアンが？」
「ユアンが食事に毒を盛られてたって話が、どうも噂で伝わっちまったらしくてよ」
　騎士団の調査が進むにつれ、もしかして自分たちが疑われているのではないかとイ

スカ城の者も勘付き始めたらしい。
テロリストたちの手によって幾人もの人手を失いながらも、精一杯皇帝一行を歓待しようと城の者たちが努力していることはメサイアにもわかっていた。その最中に生まれた突然の疑心暗鬼に、誠実な者ほど心を痛めていたことだろう。
だが騎士団も、主君のために追求の手を休めることは出来ない。表立って態度には出さないものの、領主が不在の中、両者の間にはぎくしゃくとした空気が流れ始めていた。そんな中だからこそ、ユアンは食事会を開くと言い出したのだ。
「下働きからその家族まで招いてな。毒を盛られた疑いを掛けている連中と一緒に飯を食おうってんだから、まったくユアンもたいした度胸だぜ」
いかにもユアンらしい、とメサイアは思わず口元を緩めた。騎士団と城の者たちの間に生まれた冷たい壁は、あっという間に

取り払われたことだろう。窓の外から聞こえてくる明るい旋律が、その雪解けを物語っている。

「しかし、そのほうがユアンにとっても安全だろう」

「なんでだよ」

「敵の狙いがユアンのみに限られるからだよ。無差別に人を狙うなら、そもそもわざわざ隠し通路を抜けてユアンの個室に入らずとも厨房の鍋に麻痺薬を入れれば済んだのだからね」

「だから大勢でいっしょに飯を食った方が安全なのか…」

「さきほどここにいたロレンスにもそう伝えておいた。さらに、ユアンが部屋を移った今、敵はすでに機会を失ったとね」

「なあ」

　とタイタスがメサイアの目を覗き込むようにして言った。

「もしかしてお前、すでに犯人わかってた

りとかする？」
　暗闇の中で琥珀（こはく）色の隻眼が鈍く光を放っている。
「さあ、これからそれを検分しようじゃないか。一番小さな燭台に火を灯（とも）してここへ持ってきてくれないか。お前の持ってきた名簿に目を通すとしよう」
　しゃあねえな、とぼやく声がして巨大なベッドのどこかが沈み、隣の男が去って行く気配がした。
　瞬（まばた）きもしない間に小さな明かりがベッドサイドに灯される。
「名簿は枕の下にある」
　いつのまに、とメサイアが頭の下に手を差し込むと、ガサガサとした紙の束に行き当たった。
「これは…ずいぶんと詳細だな」
　タイタスがベッドに持ち込んだのは、今回のクーデター事件の際に牢に収監された者の名簿だ。そこには血統復古党（サングイニスト）の残党た

ち、黒幕である《紅の光(ルブルムルクス)》の生徒たち、そしてその協力者たち――彼らに対して行われた聞き取りの詳細がギデオンの手による精密な筆致で書き込まれていた。
「検分には俺さまも立ち会ったが、メモったのはギデオンな。さっきも何も訊かずに全員分の顔とリストを照らし直してくれたんだぜ」
「ありがたいことだ」
今回の事件ではギデオン自身もずいぶんと怪我を負ったが、その手当が済むやいなや囚人の取り調べを指揮しているという話だった。同僚であり友人でもあるザン・オーデュポン…そしてメサイアが傷付けられたこと、その怒りが彼を突き動かしているようだ。
ギデオンの想いに感謝しながら、メサイアはベッドの上で半身を起こした。確かめるように読み進めながら名簿の表面に指を走らせる。

HARUNO ATORI / HALYOU @aikawayou

「…なるほど。やはり僕の思っていた通りのようだ。これで考えていたことの裏付けは取れた」

　名簿から目を上げると、メサイアは部屋の棚の中からペンやインク、便せんなどを取ってくるようタイタスに言った。

「手紙…？誰に？」

　さらさらと書き付けているメサイアを訝(いぶか)しむように、タイタスが眉根を寄せている。

「なに、軽い挨拶文だよ。これを一階にある僕の執務室に置いてきて欲しい。できれば目に付く場所にね」

「執務室…って例の隠し通路の終着点か。またあそこへ行けっていうのかよ。だから外からは鍵がかかってんだって…」

「ユアンが毒を盛られた部屋から辿(たど)ればまた入れるだろう。前にも話したとおり、この部屋からも執務室まで隠し通路が続いているが、そちらはできれば使わないで欲し

い」
　タイタスが中庭から侵入するのに利用している隠し通路とは別の、もう一つの通路のことだ。この部屋のどこかにある出入り口にはまだ鍵が掛かっているはずだった。
「なんでだよ」
「犯人を用心させたくないからだよ。お前が言ったとおり、通路の中は誰かが使えば必ず足跡が残る」
「う…たしかに俺さまの足跡が付いちまうのはまずいか。まあそういうことなら…」
　手紙を懐に入れ立ち去ろうとしたタイタスを、メサイアは引き止めた。
「待て、最後にもうひとつ。…お前が言うとおり、僕にはもう犯人の目星がついている。だから隠していても無駄だぞ」
　それを聞いたとたん、タイタスは目を剥(む)き「な、なんのことだよ」と後ずさった。
「昨日から僕たちはユアンに毒を盛った犯人を捜し当てようと、チームを組んで調べ

に当たっていた。ロレンス、ジェド…そしてお前。それぞれが調べてきたり見聞きした物がある。僕が正しければお前だけが『あれ』を見ているはずなのだよ、タイタス」

今のうちに白状しておくがいい。メサイアがそう言うと金髪の頭を振り、タイタスは暗い天井を仰いだ。

「はあ…やっぱそういうとこはさすがの性悪にはかなわねえっていうか…」

「性悪かどうかは今関係が無いだろう」

「うう…それで間違いないんだよな…。俺さまにはどうも…信じがたくてよ」

盛大にため息を付きながら、タイタス・ラムは答えた。

あの隠し通路の中、ユアンの部屋から閉ざされた執務室の間にたったひとつ残っていた足跡。

それは…たしかに大人のそれではなかったと。

◆

「そろそろお休みになられませんと」

主治医が手渡してきた暖かい薬酒を受け取ると、メサイアは「灯りはまだ消さないでくれ」と囁いた。

主治医はおよそ二時間おきに主の様子を伺いにやってくるようだったが、その度に控えめな量の食事をメサイアに差し出した。たいていはスープや粥だ。

今回はメサイアがそれを断ったので、粥の載った盆は脇へ寄せられ、ベッドサイドに置かれていた。その中にも薬酒と同じ匂いが漂っている。

「ご自分ではだいぶ良くなって来たように思えるかもしれませんが、実際はまだ起きていいお体ではありません。こじらせると陛下のご逗留が長引くことになるかもしれませんよ。皇城に戻る際は貴方やオーデ

ユポン卿とともにと言い張っておられるのですから」
　ベッドの上に上半身を起こしているメサイアのほうへ体を乗り出すと、医師は彼の背を支え、そこに枕を一つ足した。わずかな灯りを遮るように、医師の影がメサイアのすぐ傍にある。息が掛かるような近さで体を支えている青年に、主は低い声で呟いた。
「ユアンは早くこの城から立ち去った方がよいと？」
　医師は驚いたように身を反らし、紫水晶の瞳に凝視されているのに気が付くと、慌てて視線を落とした。
「いえ…あの、そういう意味では」
　メサイアは持っていた薬酒の入った椀を持ち上げ、医師の目の前に掲げた。
「食事にもこれと同じ薬が入っているね」
　メサイアの指摘に目を丸くする。そして目元を和らげると息を一つ付き、姿勢を正

してベッドサイドに立った。両の手はなにも持っていないことを示すためか、前で結ばれている。

「眠り薬が入っています。今はとにかくお体を休められるようにと」

「僕が今なんの中毒に冒（おか）されているか、お前は知っているはずだ」

　薄暗がりの中の強い瞳の輝きに、医師はまた目を逸らした。

「紅百合草（ヴァーミキュラス）は単体では強壮作用と覚醒作用を併（あわ）せ持つ。これを多用すると徐々に五感が鈍くなり、まずは痛覚を失っていく」

　メサイアは目を細めるようにして、これといって特徴の無い青年の横顔を見つめた。その頬は心なしか青ざめているようだ。

「ただしこれをかなり希釈して睡眠作用のある薬草と併用すれば、強力な睡眠導入剤にもなる。匂いも微（かす）かなものになるので、気が付かない者も多い。僕自身はこの匂いに敏感なのだけれどね」

メサイアは椀を降ろし、それをベッドサイドの盆の上に置いた。
「ドルミラ山のネヴァン＝イグニス族由来の使い方だ。この製法を知っているのは…そう、血統復古党（サングイニスト）の研究機関の関係者のみ。僕の食べ物にその眠り薬を混ぜているのだね」
医師は苦しそうに俯（うつむ）いたまま、ただひと言「はい」と答えた。
しばらく沈黙が流れた後（のち）、医師はメサイアに向き直り「私を解雇なさいますか」と訊ねた。いいや、とメサイアは首を振った。
「実をいうと、僕はお前の出自に気が付いていてお前を主治医に選んだのだよ。お前が主治医に名乗り出てきた時点で、すでに身元は調べてある」
「経歴は洗っておいたはずですが、気付かれていましたか…。私が血統復古党（サングイニスト）の教育機関《紅の光（ルブルムルクス）》出身だと知っていて雇われたのですね」

メサイアが頷くのを見て、医師の唇がわずかに震えた。
「知っていて私にその身をお預けになったというのですか…！私は主治医ですよ？言ったとおり、その御身をいかようにも出来る立場にある。とくに貴方の四肢が動かない今は、その命も私の手の中にあるようなものです」
「考えもなしに危険を放置するような男ではない、そのメサイアは」
闇の中から低い声が響き、医師ははっとして背後を振り返った。
いつからそこに居たのだろうか？広い寝室の闇の中に長身の影が立ちはだかっている。
「まさか。貴方さまは一度この部屋を出て行かれたあとは、控え室を通っていないはずです」
医師の震える声に、今度は快活に応える影があった。

「すみませんね、団長と俺は今回は中庭から隠し通路を使わせて貰ったんです。あのタイタスが恋人の元へ通うのに足繁く使っている道ですが」
　書棚にもたれるようにしてことの成り行きを見守っていたらしい。そこから身を離すと、ほっそりした影が音もなくベッドに近付いてくる。騎士団長の隣に立ったジェドはにっこりと医師に向かって微笑(ほほえ)んでみせた。暗がりの中で淡い色の瞳がきらきらと輝いている。
「言っとくけど付き合ってねーからな。いくらなんでも俺さまそこまで趣味悪くねえから」
　窓際から抗議の声がする。タイタスは先ほどから窓枠に座り込んでいたらしい。カーテンがはためく音がすると、次の瞬間にはベッドの脇に姿を見せた。天蓋の支柱にもたれながら頭を掻(か)く。
「皆で使ったら隠し通路でもなんでもねー

じゃん。もうただの通用口だって」
　寝室に集った者たちの姿を見渡し、領主の主治医は足をもつれさせるようにしてベッドから退いた。
「私の出自に関して責められるのは仕方がありません。もしもそうしたいなら、いますぐ牢に放り込んで下さっても…」
「そうではないよ。僕らはただ少し、話を聞きたいだけだ」
　彼の主が静かに言った。
「陛下の食事に麻痺薬が混ぜられた事件のことは知っているね？」
　そう訊ねられると、青年はおののいたように目を見開いた。
「…！…はい、存じております。城の者が噂しておりました」
「事件のあらましを聞いたとき、いったい誰がユアンを狙ったのか…、実をいえば僕には見当が付いていたのだよ。…というより、僕だけがそれを知っているといったほ

うがよいだろうか。ただ考えを断定するには『可能性を埋める断片』が足りないということにも同時に気が付いていた」

メサイアは長身の影に目をやった。揺るがない──信念の上に根を張って、暗闇をものともしないその姿。

「ユアンが秘密を抱えている…誰かの存在を隠しているとこの騎士団長から告げられたとき、僕はそれこそが『断片』だろうと考えた。ロレンスには思い当たる節があるようだった。それはそうだ。彼ほど陛下を見守っている人物は他にいないのだからね」

ロレンスは身じろぎもせずにやりとりに聞き入っていた。宴会が終わった後、ユアンの身柄をアナか誰かに預けてメサイアの寝室にやって来たのだろう。今夜を境にユアンの身に危険など及ばせない──押し黙っているだけに、そんな気迫がその姿から伝わってくる。

「そしてロレンスが口にした人物こそ、お前だったのだよ」
　メサイアは主治医に向き直った。
「お前こそが、この謎の最後の『断片』だ」
「私…がなに…を」
　床を滑（すべ）るように近付いてきて主治医の腕を掴んだジェドが「しっ」と囁いた。
「静かに。…なにか、音がします」

◆

　ごとり、と重い金属音が響き、続いてなにかが軋（きし）む音がした。
　灯りの消えた真っ暗な部屋、窓の向かい側にあたる北側の壁。そこに取り付けられた飾り棚の一角が、ぎいと音を立てて開いていく。
　その者の手にあるランプの明かりがぼうっと周辺を照らし、おかげで豪華な寝室に

は一層深い闇が訪れたかのように見えた。

部屋の中央に進んだ影は小さく、潜ませた足音は軽く、ランプに照らされた顔は年少のジェドよりさらに幼かった。ただその目は隈に縁取られ、オレンジの光を通しても顔色は暗く、生気を失っている。

知らない者が見かけたらこの世のものではないと思うかもしれない。それほど少年の影は儚く、足取りはおぼつかず、まるで夢幻の存在のようだった。

唇を噛みしめる表情は緊張に満ちており、ベッドの大きな天蓋を見つけたときにはますますその色が濃くなった。汚れた上着の中にそろりと忍ばせたその手には、小さなナイフが握られている。

「…約束通りの時間だね」

天蓋の中から聞こえてきた声に、少年はびくりと体を震わせた。

「傍へおいで」

少年は恐れをなしたかのようにそこに踏

みとどまり、しばらくすると決意したかのようにそろそろとベッドの脇に近付いた。
「動けないんだ。開けてくれ」
　その声に導かれるように天蓋の重いカーテンを開き、ランプをそちらに向けたとたん、少年はがくりと膝を折ってその場に伏せた。
「貴方なんですね…本当に貴方なんですね、アマデウス様」
　床に放り出すように置かれたランプから手を離し、ナイフを握りしめたまま少年は顔を両手で覆った。
「なぜ…僕を呼んだのです」
「…すまない」
　静かな声が詫びを告げると、少年は拳で力なく床を叩いた。
「謝らないで下さい！僕が何をしたか気が付いているんでしょう」
　彼は胸元からメサイアからの手紙を取り出すと、それを床に叩きつけた。そこには

ただ『夜中の二時に待つ』と記されており、『アマデウス・フロックハート』と領主のサインが添えられている。

「僕にはすぐにこれが本物の貴方の字だとわかってしまった…あの執務室でも貴方の痕跡を探したのです。貴方の書き記したもの、サイン、領主印…忍び込んではそれを眺めていたのだから」

「…鍵は？」

「侍従長の死体を丘に埋めに行ったのは僕です。あの時はたくさんの穴を掘らされました。それも仲間を裏切った罰の一つだった。侍従長を埋めたときに、僕は死体から鍵を奪い、それをずっと隠し持っていました。これがあれば城の重要な場所に出入りできると知っていた」

涙をこらえているのか、少年の声がくぐもった。

「いつか…貴方にも…」

「いつか僕に復讐するつもりだったんだね」

領主は横たわったまま言った。
「デュベリー家の館で、君は僕を逃がすため仲間を裏切った。そして仲間から制裁を受けた。傷だらけになりながら紅百合草を取り上げられ、さぞかし痛い思いをしただろう」
禁断症状と遮断されていた痛感が蘇った痛みだ。それをメサイア自身もさんざん味わった。
「しかし…復讐ならばまずこの僕を狙うべきだった」
「そう…ですか。やはりあの人を…庇うのですね」
押し殺したように少年が言う。立ち上がる気配がして、メサイアがふと顔を上げると、そこにたしかに見知った姿があった。メサイアが最初に囚われていた屋敷で、身の回りの世話をしてくれていた少年の一人だ。
同じ教育機関の出身でありながら天才と

謳われ、少年時代には探偵として英雄のように活躍し、その果てには皇帝候補者に選出され、理念のずれた前領主を断罪し、とうとう帝国の宰相まで登りつめたメサイアを彼は神のように崇めていた。

そうやって熱い眼差しを向けてくる少年の想いを、メサイアは利用したのだった。

ザン・オーデュポンと少女ベレンガリアを逃がすために、メサイアは少年に館の見取り図と処方されている毒の解毒薬を手に入れてこさせた。館を抜け出すまでは計画通りに進み、そのままうまくいくと思われた脱出は、裏切りを嗅ぎつけた《紅の光》の少年少女たちによって失敗に終わる。

なんとかベレンガリアだけは逃がせたものの、ザンとメサイア自身は再び捕まって、前より激しい拷問と洗脳を受けることとなったのだ。

捕まった少年が仲間から酷い仕打ちを受けていることは聞いていたが、同じ囚われ

の身であったメサイアにはとうとう彼を救い出すことが出来なかった。

領主の寝室に忍び込んできた少年の姿は以前見たときよりも痩せこけていて、着ているものもすっかり泥と血にまみれている。

床に置かれたランプの明かりは少年自身の体で遮られており、はっきりと表情は見えないが、それでも食い入るような視線だけははっきりと感じることが出来た。

メサイアは横たわったまま寝間着の喉元をくつろげて首元が見えるように晒(さら)し、目を閉じた。

「殺したいなら早くするがいい。それが出来る時間は一瞬しかない」

「…っ、アマデウス様…！」

衝動のまま少年がナイフを振り上げる。しかし振り下ろされた先はメサイアの首ではなかった。

少年が自らの喉を突こうとした瞬間、そ

の腕を誰かの大きな手が掴む。
「そこまでだ」
　闇の中から現れた白鳳騎士団長の姿に目を見開くと、少年の手からナイフが落ち、豪華な装飾の床にわずかな傷を作った。
「さて、これは俺たちにとってはまったく新しい登場人物だ。どういうことか、説明して貰えませんかね、宰相殿」
　ナイフを床から取り上げ、くるくると回しながらジェドが言う。その口調の軽さに反して、彼の青い目には真剣な光が宿っていた。

◆

「──つまり、この少年は《紅の光(ルブルムルクス)》の一員だが、裏切り者であったがために城内の小部屋に閉じ込められていたと」
　椅子に座らされ、軽く手足を縛られた少

年を見ながら、ロレンスが言った。
「だからあの朝、門前広場に姿を見せず、一味とともに拘束されることもなかったのだな」
　メサイアは頷いた。
「僕さえ倒れていなければ、この子のことは指摘できたはずなのだが…」
「それはしょうないでしょう。あんたは眠り薬を盛られつつ昨日まで意識を失ってたんですから」
　ジェドがため息をつく。
「それで囚人の名簿を確かめたんですね。そして宰相殿は裏切り者のこの少年が囚人の中にはおらず、まだ誰にも見つからずに城内をうろついていると確信した」
　少年の横で苦々しい表情を浮かべているのはタイタスだ。
「じゃあ犯人はやっぱこいつなのかよ…。やけに細っこいが何歳だ？」
「十三だと言っていた」

とメサイアが答えた。二人が親密になった期間に、お互いのことを教え合っていたのだ。
　メサイアは少年がどの町の出身かも知っていた。国境近く、辺境だが小さくはない町の出身だ。
　少年は項垂(うなだ)れ、彼らを見ようとはしなかった。それをメサイアの主治医が気遣(きづか)わしげに見つめている。
「まじガキじゃねーかよ」
「あんたはその頃にはとっくに盗賊団を率いていたでしょ。ガキはガキなりに行動力があるんですよ。しかもこいつは血統復古党(サングイニスト)にスカウトされるほどの秀才だ。今回の事件に関わっていたんだから、《紅の光(ルブルムルクス)》の中でも指折りのエリートって奴です」
　ジェドの唇が微(かす)かに嫌悪の表情を浮かべた。
「そしてもちろんどうなるか知っていて…ユアンの食事に麻痺薬を混ぜたんですよ」

ロレンスが押し黙ったまま腕を組む。彼の言いたいことはわかっていた。

血統復古党（サングイニスト）の残党はこれまでも何度もユアンを暗殺しようと狙っていた。この少年もそのつもりではなかったのかと考えているのだ。

「…待って下さい」

そう切りだしたのは、メサイアの主治医だ。

「私にはなにも…言う資格がないのはわかっています。だがあの麻痺薬ではすぐに人は殺せない。殺すつもりなら他にいくらでも手段はあったはずです」

「…いかなる手段だろうが、その少年は陛下を傷付けたのだ」

答えたロレンスの声は固かった。

「先生、あんたは…もしかしてこの坊主の存在を知っていたのか？」

ジェドがそういうと、「なに…」とロレンスが低く呟いた。

医師は下を向き、ただ一同に向かって頭を下げた。
「そう、彼はこの少年の存在を知っていたのだよ」
メサイアは言った。これが『断片』の正体だ。全ての謎の答えが埋まる。
「傷だらけで花の中毒に冒（おか）されたこの少年が、誰にも見つからずに城の中を何日も行き来することは不可能だろう…そう僕は考えていた。この城の中に、クーデター解決の騒ぎに乗じて彼を逃がし、庇（かば）い、手当てして食事を与えた者がいなくてはこの推理は成り立たない」
「そう言われてみれば…この坊主の禁断症状を抑えられるのは、紅百合草を処方できるものに限られますね！」
ジェドたちの視線が医師に集中した。
「しかし、少年は侍従長の鍵を手に入れていたがために、この医師の手の届かぬ所に身を隠してしまった…そうだね？」

メサイアが問うと、医師は頷いた。
「たしかに…鍵の掛かった小部屋で瀕死の状態になっていた少年を発見したのは私です。《紅の光(ルブルムルクス)》の生徒だとすぐにわかった…。このままだと仲間と同じ牢に収容され、虐(いじ)め殺されてしまうと思いました。あるいは彼らは弱ったこの子を、残党のおもちゃとして与えてしまうかもしれない。…そうでなくとも牢の中で弱い子供たちがどんな目に遭(あ)うかはご存知でしょう？そもそも血統(サング)復古党(イニスト)の残酷なやり口は、同じ出身の私が一番良く知っています」
たしかにギデオンとタイタスはその可能性も見据え、子供たちの牢を大人とは別の場所に分けてはいた。しかし子供たち同士の間でどういう虐待があるのかまでは考慮に及んでいなかった。収容された者の多さに対し、牢の房に限りがあるのも理由のひとつだ。
「だから私は彼を自分の部屋に匿(かくま)って、治

療をしてやりました。しかし痛みをとってやるために紅百合草を処方したせいか、体がきちんと回復する前に動けるようになったようで…気付いたらどこかへ消え去ってしまっていたんです」

医師は小さく震えている少年を見やった。

「実は…今回のクーデター騒ぎが収まった直後、私は城内に放置されたままになっていた血統復古党（サングイニスト）の毒薬や紅百合草を回収していました。毒物に無知な人々がうっかり手に取らないようにするためです。アマデウス様の体力が回復したら、それを全て預けるつもりでいました。しかしそこから麻痺薬が消えていることに気付き、戦慄した…」

「お前は少年がそれを持ち出したことに気が付き、使うかもしれないと思ったのだね。そして先手を打って、ユアンに解毒薬を手渡していた」

「なんだと…」
　ロレンスが驚き、唸り声を上げる。
「麻痺薬を飲んでしまったと気が付いたユアンは、即座に解毒薬を飲んだ。会ったばかりの人間の言葉を信じて…」
　それが解毒薬でなかったとしたら、ユアンはいったいどうなっていただろう。
　メサイアの言葉に医師は涙を浮かべた。
「何度かこの部屋を訪れていらっしゃったので、陛下とは内密に話す機会がありました。こっそり解毒薬を手渡し、『なにも聞かないで、なにかあったらこれを飲んで下さい』と私は伝えました。陛下は信じて下さった…そして他言もせず、腹の中にすべてを収めてくださった…」
「あんたがメサイアの主治医だから信じたんですよ、ユアンは」
　腹立たしさを隠そうともせず、ジェドが怒鳴った。
「メサイアが信じて選んだ主治医を、自分

も信じようと思ったのだろう。ユアンはそういう人だ」

　ロレンスがふいに胸を突かれたような顔で言う。

「だが信じて良かったのだ。解毒剤がもう効いていたせいか、スープを吐き出したあとのユアンはすぐに顔色を取り戻した…先生には感謝しなければならないだろう」

　納得がいったように頷いたロレンスの顔を「はあ？」とジェドが覗き込んだ。

「団長もたいてい人がいいですね！そもそもこの人さえすぐにクソガキの存在を白状していれば、こんなことにはならなかったんですよ！」

「しかしよお…」

　納得がいかないとでもいうように、タイタスが首を傾（かし）げた。

「なんでこの医者は、ガキがユアンを襲うと考えたんだ？復讐ならメサイアを狙うはずだろ」

「それはやはり、子供とはいえ彼が血統復古党（サングイニスト）の一味だからだろう…」
　そう言いかけたロレンスを、医師の言葉が遮（さえぎ）った。
「いいえ！…いいえ！異を唱えることをお許し下さい…！どうか」
　医師は床に膝を付いた。
「恐れながら…。彼は治療中ずっとうなされていました。『アマデウス様を奪われた』と」
「奪われた…？誰にだよ」
　タイタスの答えに、医師はやっとのことで声を出した。
「陛下…ユアン・ジュノー＝イグニス様にです。アマデウス様が誰のために自分を罠に掛け、捨て去ったのかようやくわかったと言っていました。すべてはユアン陛下の御（おん）為（ため）に…」
　一同は言葉を失い、ただ医師を見つめた。
「原因は…嫉妬…だというのか」

わけがわからないとでもいうように唖然としてロレンスが呟いた。
「ユアンを傷付けたって、メサイアを自分のものにできるわけがないだろうっ！」
ジェドの怒りが爆発する。彼は少年の首元を掴み、力ない体を揺さぶった。
「お許し下さい…！」
医師が体を床に投げ出すように言った。
「おっしゃる通りです…。しかしこの領の者は、大なり小なり同じ想いを抱えているのです」
ジェドの目と口がぽかんと開かれる。
「領…だって…？」
静まりかえった闇の中に、少年の微かなすすり泣きが響いた。
「民が同じ想いをユアンに抱えている…？だからこそこのイスカ領がクーデターの舞台に選ばれた…とでもいうのか…？」
ロレンスが遠くを見つめるように言った。

イスカが『真の皇帝』の伝説が色濃く残る土地だからという理由だけではない。ここには中央から遠く、見捨てられているという認識が常に民の間に蔓延している。
その前提の上で、自分たちの領主であるメサイアをイスカの地から遠ざけているのは中央――つまりはユアンではないかという疑念がこの領の者たちの胸にはあるのだろう。
「それを知っていたから、メサイアは…全ての責任は自分にあると…永久牢行きを申し出たのか」
メサイアは目を閉じた。全ての罪は自身にあるということはわかっていた。
まずは帝国の中心を安定させること、ユアンを皇帝として立たせることばかり考えてきたのは自分だ。胸の中に自領のことは後回しにしてでも、ユアンを優先させるという気持ちがあったのはたしかなことだった。

だからこそイスカ領民の心は、簡単に新たな『真の皇帝』へと傾いた。メサイアの行ってきたことが、結果的にはユアンを傷付けることになってしまったのだ。

それは今回の毒物混入事件の原因──ユアンの元へ戻るために信奉者である少年を置き去りにし、そのことがユアンの身に危険を及ぼしたこととちょうど構図が似通っていた。

「私も…それは同じ想いでした。アマデウス様はこの領の希望なのです…」

医師は頭を床に付けるようにして言った。

「希望などと。少し大げさな物言いではないか」

メサイアが怪訝な調子で言うと、医師は言葉を続けた。

「覚えてはいらっしゃらないと思いますが、私は以前、アマデウス様に命を助けられています」

「な…」
　メサイアは驚き、一瞬言葉を失った。この男が血統復古党（サングイニスト）の研究機関にいたことは経歴を調べた際にわかっていたのだが…。
「僕たちは以前に会っていたのか？」
「貴方がまだ《紅の光（ルブルムルクス）》の生徒だった頃のことです」
　青年は顔を上げたが、視線を上げることはなかった。
「その頃、私はまだ学生でしたが、成績の良さを買われ、党の研究機関で助手として働いていました。自分が何の薬を作っているのか、そんなことはどうでもよかった…。とにかく一人前として認められることしか頭になかったんです」
　メサイアは頷いた。工作員の中でも専門職にあたる研究員には、きわめて優秀な者だけが選出されることになる。助手から正式に採用されるには、さらにそのエリートたちの中から勝ち残らなければならないは

ずだった。
「《紅の光（ルブルムルクス）》に連れてこられてから、私たちには外出の自由もなく、故郷に顔を出すこともできませんでした。しかし正式な研究員になれば、自由が与えられると聞いていました」
そして来る日も来る日も紅い花を噛みながら、青年は自分の体と頭脳を酷使した。なにも珍しいことではない。《紅の光（ルブルムルクス）》の生徒ならば、だれしもが幼い頃からやっていることだった。
「だが体に限界が近付いていたのでしょう、ある日私はミスを犯してしまいました。それが先輩研究員の悋気（りんき）に触れ、私は脱落者のリストに名前を載せられてしまった」
それもよくあることだった。彼らはあとからやって来る自分のライバルを蹴落とすために、わざとミスを誘発させることすらある。
特別優秀だったこの青年が先輩研究員に

嵌(は)められた可能性すらあるなとメサイアは考えた。
「一度脱落者としての烙印(らくいん)を押された者は、二度と這い上がることができません。それどころか生きて日の目を見ることすら不可能でした」
「どういうことだ」
　ロレンスが驚いて言った。彼は去年までは学生だった身だが、学問から脱落する者など珍しくもないと思っていたのだろう。そのような者たちは、たいていは黙って故郷へ戻るだけだ。そう、そこが普通の学び舎であれば――
「血統復古党(サングイニスト)において脱落者とは、敗北者を意味する。すべての人権を奪われるのだよ」
　メサイアは言った。
「そのたいていは年端もいかない若者たち、子供たちだ。彼らの肉体、生命は党員の玩具となることが決まっていた」

つまり抑圧された環境には、敗者の存在が必要だったのだ。重圧や恐怖を忘れるために、そのはけ口になる者たちが。

「私は被験者のグループに入れられました。…人体実験というやつですね。昨日まで自分が作っていた怪しい薬品を己の体で試すことになったのですから、ある意味自業自得と言えるのかもしれません」

医師は自嘲気味に言い、床に付いた拳を握りしめた。

「同じ場所に監禁されていたものが、一人、また一人と命を失っていく…その中で私は恐怖に怯えていました。いつ自分の番が来るのかと…。もう大切な人々に再会することは叶わないのかと…。その時でした。救いの手が現れたのは」

彼らを解放したのは、年の頃十を越えたばかりの少年だった。

少年は名乗らなかったが、フードに深く隠された美貌を垣間見て、青年はすぐにあ

の特待生のアマデウス・フロックハートではないかと気が付いたという。その名はすでに内部で知れ渡っており、将来は次期党首に選出されるかもしれないと噂されていた。

「アマデウス様、貴方が…私たちを牢から出し、塀の外まで案内してくれたのです。あの夜のことは片時も忘れたことがありません」

「はあーちっこいときから無茶ばっかやってたんだなお前…それ見つかったらやばかっただろ」

呆れるようにタイタスが嘆息する。

「見つかるようなヘマを僕がすると思うのか。それに少年時代に無茶をしていたといえば、むしろ貴様の方だろう」

メサイアがぶつぶつ言うと、まあまあとジェドが間に割って入った。

「それで、先生は自由の身になったと」

医師は頷いた。

「私は故郷へ戻りました。そこで…自分を育ててくれた祖父母が亡くなっていたことを知った。念のため墓を掘り返した私は、すぐに彼らが殺されたとわかりました。家の中には争った後があり…そのまま十年分もの埃が積もっていた」

絞り出すような声で彼は続けた。

「埃の下には想いをあざ笑うかのように、家族が私に宛てた何十通もの手紙がばらまかれていました。それらはようやく届いた私の手の中で、ボロボロの塵となって消えました」

同じだ、とメサイアは思った。

彼がとうとう正式に次期党首候補に選ばれ、あらゆる特権を手にしたのは十五歳になるかならないかの頃だ。自由になった立場を利用し、メサイアは人知れず故郷へと戻った。そしてようやく両親を捜し当てたのだ。

彼らは凍り付いた土の下に居た。白骨化

した様子から、彼らの死はメサイアが《紅(ルブ)の光(ルムルクス)》に召し上げられた直後のことだったろうことが窺(うかが)い知れた。

土にまみれた遺骨の手には、小さなお守りが握られていた。朽ちかけたその表面に裁縫に慣れていない母親のぎこちない手で自分の名が縫い取られているのを見、彼は決意したのだ。

党首を断罪し、血統復古党(サングイニスト)の全てをこの世から消し去る、親元から子供たちを奪っていく《紅の光(ルブルムルクス)》を解体してみせると。

「私は再び故郷を去り、党が人々に与えてきた痛みを少しでも癒(い)やすことができればと思い、町医者になりました。意外にもそこでは党で得てきた知識が役に立ちました。そのまま一生を終えようと思っていたとき、あの皇帝暗殺事件が起きたことを知ったのです。その首謀者であるイスカ領主ロンギヌスをアマデウス様が追いつめ、断罪し、とうとう永久牢へ落としたことも…。

…私は歓喜しました。あのロンギヌスは私の祖父母を殺した元凶でもあったのですから」
　重々しくロレンスが頷いた。皇帝であった父を奪われた彼にも、ロンギヌスに対するやるかたない怒りは理解できるのだろう。
　ちょうど今回の旅の途中で、ユアンとザンの両親を奪ったのもその前イスカ領主だったというのが判明したばかりでもある。
「私は新領主になられたアマデウス様が血統復古党（サングイニスト）を殲滅（せんめつ）し、あの《紅の光（ルブルムルクス）》の解体に着手されていると知り、いてもたってもいられなくなりました。なにかお手伝いがしたかった。だが私にできることは治療だけ…だから思いきって主治医に応募したのです。まさか採用されるとは思いませんでしたが」
「それで…『希望』か」
　ジェドが低い声で言った。

「この領主様があんたたちにとって光だというのはよくわかった。だが、それで今回の罪が軽くなるわけじゃないでしょう」

「ただ…私は…」

　医者はぐったりと椅子の上で力を失っている少年を振り返った。

「彼らの未来も変わる可能性があると言いたいのです。もしも私と同じように救いの手が差し伸べられていれば」

「しかし…」

　なおももの言いたげなジェドを、ロレンスが遮った。

「もういい。とにかく犯人は捕らえたのだ。ユアンの危機は去った」

　メサイア、と騎士団長は友人を振り返った。

「彼らの身柄はいったん騎士団が預からせて貰う。さらに詳しく取り調べをしなければならない」

「そうしたまえ」

メサイアは頷いた。
「その上で…その後、彼らをどうするかは、領主であるメサイアに一任する」
「それで…いいのか」
ロレンスの深い青の瞳がまっすぐに彼を見る。メサイアはそれが信頼の表れであると感じ、思わず胸の奥が熱くなった。
「少しかかるかもしれないが、なるべく早く主治医は返そう。解放したところで、彼はユアンに危害は加えないだろう」
「団長…！」
「主治医を戻すことがメサイアの回復に繋がるなら、それに越したことはない」
「しかし…」
なおも食い下がり、詰め寄るジェドの胸をロレンスは手のひらで押し返した。
「冷静になれ、ジェド・ベル。お前はユアンを傷付けられた怒りを晴らそうとしているだけだ。ちょうどあの少年のようにな」
「団長もそうでしょ！内心はめちゃくちゃ

怒ってるくせに…」
「ユアンならどうするか…ユアンがどうしたいと思うか。俺にはそれだけだ」
　ロレンスの言葉にあっけにとられたジェドは、メサイアたちを振り返った。声に出さず罵詈雑言を浴びせながら、ロレンスを指す。タイタスが諦めろとでもいうように首を振った。
「ったく、脳筋じゃなくて脳ユアだな。堅物の頭ん中にはきっとユアンしかないんだぜ」
　警備兵を呼び、騎士団員を寄越すように言いながら、大股で出て行くロレンスをメサイアは見送った。ぶつぶつ言いながらジェドが後を追う。彼らが医師と少年を連れて行ったので、後には犬猿の二人だけが残された。

◆

タイタスの姿が寝室の暗がりに消えたので、メサイアは彼が部屋を出たのかと思い、灯りを消そうと手を伸ばした。
「待て待て、もうおねんねかよ」
そう言いながら戻って来たタイタスの手に美しいカットの瓶が握られているのを見て、メサイアは眉を顰めた。
「そこの戸棚から拝借してきたぜ。こりゃとびきり上等なアクア・ヴィテだ」
イスカの数少ない名産の一つ、麦を使った蒸留酒だ。滑らかな液体が鈍く明かりを跳ね返すさまを眺めながら、元盗賊が舌なめずりをする。
「よく飲めるな…。そいつはあのロンギヌスがしまい込んでいた酒だぞ」
「はあ？お前だってそのおっさんのベッドに横たわってんじゃねーか」
「言うな。今すぐ叫びながら飛び出したくなる」

　メサイアがそうこぼすと、タイタスは笑い声を上げた。ブーツを投げ捨てるとメサイアの横に上がり込み、グラスを差し出す。
「お前も飲め、医者がいないうちにな」
　メサイアがグラスを覗き込むと、そこにはあの赤い花びらが浮いていた。
「これは…紅百合草」
「お前に毒（はな）を盛る医者がいなくなっちまったんだから、やっぱり俺さまが盛るしかねーだろ」
　メサイアは黙って、乾燥した花びらが酒の中でほぐれていくのを眺めた。甘い香りが立ち上ってきて、彼は少しグラスを遠ざけた。
「やはり中庭で隠し通路を偶然見つけたというのは嘘だったんだな」
「なんのことだ」
　どんなお屋敷だろうがめったにお目にかかれないような値段の酒を無造作にあおりながら、タイタスが訊ねた。

「貴様は誰にも見つからないでこの部屋に出入りできる道を、わざわざ探してここまで来たんだ」
「なんのために」
「僕にこれを食わせるためにだよ。あの森の中で約束したように」
まずは痛みを抑え、治療に専念するためにもメサイアの体には紅百合草の効用が必要だった。しかし彼自身はこの花を自ら採ることに激しい嫌悪感がある。
それを察してタイタスが言ったのだ。
お前は俺にこれを無理矢理食わされるのだ、だから気にする必要はないと。
「あのな…」
とタイタスが言った。
「お前は自分がユアンにかまけて、このイスカをほったらかしたから事件が起きたみたいに思ってるだろ」
「なんだ、いきなり」
驚き、メサイアは隣の男を見た。タイタ

スは手元の瓶を揺らしながら、カッティングによって様々な角度に跳ね返る光を眺めている。

「俺さまん時もそうだったんだよな。…ほら、俺さまがルーメンをほったらかしててさ。だからしばらくいざこざが止められねえで…」

タイタスも自領内に反乱の種を抱えていた。そこを血統復古党（サングイニスト）に利用されたこともある。それだけではなく今回のことでも、彼のルーメン領は大きな被害を被った。

「俺さまの出生でごたごたがあったのも今年の春だ。どっちもユアンと皆が力を貸してくれた。そんで…お前がいないとどっちも上手く収まらなかった。春の件では真っ先に動いてくれたのがお前だったっけ」

それは自分自身がこの男を失うわけにはいかないと思ったからだ。

「どちらも帝国のためであり、ユアンのためであり、僕のためでもあった」

「だからよ、そういうことなんだよ」

「なに？」

瓶の中身と同じ色の瞳で、タイタスは彼を見つめた。

「俺たちはやっぱ全員揃わないと、なにひとつ渡っていけないんだって。だからお前も俺さまも自分の領地を後回しにするのは当然のことなんだぜ。なにせバラバラだとなんもできないんだからな。今回もそうだっただろうが。結局はみんなで寄ってたかって解決するしかなかったんだ」

「……」

「だからなにが言いたいかっていうと、なにか事件が起こるとしたら全員のせいだし、それが収まるとしたら、全員のおかげってこと。あの堅物も言ってたぞ。あいつはユアンのために故郷のオウラードを放り出したんだと。だからお前よりもよほど罪深いとさ。たまたまオウラードはうまく収まってるが、あそこは今でも領主不在だし」

ロレンスやタイタスの言いたいことはよくわかる。ただの慰めではなく、それが本当のことなのだろう。起こったこと全てが、ユアンを含めた自分たちの行動の結果なのだ。

「それでも僕は…」

自分を完全に赦すことは出来ない。

メサイアは輝く液体に混ざる紅の色を眺め、それがどこかに消えるように願いながら、グラスを飲み干した。

◆

どこか遠くで声がする。

「…いつ目を醒ますのかな、君は」

知っている声のような気がして、メサイアは夢の中で耳を澄ました。

「早く君の声が聞きたいよ…。病人をあんまり急かすなと、アナには怒られるけどね」

いったい誰に遠慮しているのか――それは本当に小さな声で、注意深く聞いていなければ何を言っているのかわからなかっただろう。
「今朝はね、ザンに言われてここに来たんだ。いますぐ伝言があるって言ってた。前にここの中庭で伝えたことの続きだって」
ザン・オーデュポンがイスカ城の中庭で伝えたこと…？
あれはもうだいぶ前の出来事のような気がするが、よく考えればほんの数日前のことなのだった。それからどれだけ状況が変化しただろう。
想像も出来ないことが次々と起こり、自分たちはそれを乗り越えてきた。
「あのね、今朝、暗いうちに俺の命の危機がようやく去ったんだって。暗雲が全て取り去られるためには、やっぱりメサイアが必要だったんだって」
内緒話をしているかのように潜められる

声。

「俺にはなんのことかわからないけど…とにかく伝えたから。たしかに俺のスープになにか混ぜた犯人が捕まったらしいけどさ。おかしいよね。メサイアはずっと眠っていたんだし」

誰かがメサイアの手の甲にそっと触れた。温かいものが重ねられ、柔らかく包まれる。

「犯人は少年だった。…彼はメサイアを俺に取られたような気がして、悔しかったらしい。だけど…俺にはその気持ちを責めることができないよ、メサイア」

手の暖かみが、胸の中まで彼を温めていく。

「俺はね、ザンが『真の皇帝』に即位した時、それでもいいと思ったんだ。…だけど…メサイアがザンを選ぶと思ったとたんに胸が痛くなった。しかたないとは思った。だってザンにはその資格がある。君が探し

ていた至宝は、本当は彼だったんだから。だけど…」

　声はためらうように言った。その声がどんどん遠のいていく。

　いや遠のいていくのは自分自身だ。

「メサイアが俺のことを見なくなってしまう、そのことがたまらなく怖かった。もちろん俺はザンのことも大好きだから、彼になにかしたいなんて思わないけど…あの少年の気持ちもわかるんだよ」

　握る手にほんの少し力が込められるのを感じ、メサイアは夢の中で微笑んだ。

　彼は深い眠りへと落ちていった。

　両親の行方を捜し当てて以来、あの冷たい大地がずっと自分自身を凍らせていたような気がする。

　それを融かしてくれる存在を、彼は得た。

　一人ではない。

　仲間の数だけ、彼は安らげる。

　相変わらず彼は自らを赦せないでいる

し、自身の罪を思うと心まで冷えていくような気がする。
　だが今は、その度に温もりを与えてくれる存在がある。
　失わない、二度と――
「どこかに…行くなんて言わないで欲しい、メサイア。ずっと俺たちの傍にいて欲しい。どうしても君が奈落の底に行くというなら、俺がそこに付いていくよ。だから…」
　森の中で血を流しながら彷徨っていた狼はようやく日だまりを見つけ、そこに丸まり――
　大きく背中を揺らしながら、ひとつ深く息を付いた。

《横たわる探偵の事件簿　おわり》

HARUNO ATORI / HALYOU @aikawayou

思っていたより少し長くなってしまいましたが、最後まで読んで下さってありがとうございます！

このお話は時系列としては「少年皇帝と月影の騎兵団」の最終話 25 話の途中のお話となっています。

メサイアが色仕掛けで？落とした少年がどうなっているかは、エンディングあたりをやりながらちょっと気になっていました。

本当のところどうやって落としたかというのははザンが気にしているので、メサイアの口を割らせるザンのおまけ SS とかアリかもしれないと思いました。

それと前にもお知らせしたのですが、番外編としてはあと二本ほどやりたいなと思ってます。

隙を見てなんらかのタイミングでアップするかもしれないので、（できれば秋あたり…）もしよかったら気長にお付き合い頂けたら嬉しいです。

（2018/8 相川）

花鶏没ラフ